

探検! 体験! Explore! Experience! Edo-Tokyo 江戸東京

解説シート 第1章

もっと探検! 江戸東京



❀ 将軍の都 ❀

今からおよそ 400 年前、徳川家康が江戸に幕府を開いてから、大都市東京の歴史が始まりました。将軍が住む江戸城を中心に、大がかりなまちづくりが行われ、ここに数多くの武士とその暮らしを支える町人たちが生活しました。都市が大きくなるにしたがい、幕府は、江戸の人びとの飲み水を供給する上水道を作り、たび重なる火事を防ぐために消防の組織を整えました。まずは、都市江戸のあらましを見ていきましょう。

クイズに挑戦!

「火事とけんかは江戸の華」と言われたほど、江戸は火事の多い町でした。最も大きな火事は 1657 年（明暦 3）に起きた「明暦の大火」で、町の大半が焼きつくされ、江戸城の天守も焼け落ちてその後再建されることがありませんでした。

享保の改革で有名な第八代将軍徳川吉宗は、1718 年（享保 3）町火消の設置を命じ、町奉行大岡忠相は、町の地区ごとに「いろは」順の名前をつけた町火消組を編成しました。

さて、町火消は、俗に「いろは四十八組」と呼ばれましたが、その中に、なかった組の名前があります。それは何でしょう。下の中から選んでください。（答えは 2 つあります）

※正解は下にあります。

- ①よ組 ②ふ組 ③ひ組 ④へ組 ⑤ほ組 ⑥け組



「火事図巻」長谷川雪堤／画 1826 年（文政 9）

1772 年（明和 9）に起きた目黒行人坂の大火を描いています。火消たちが、屋根にのぼって纏をふるい、鳶口や龍吐水を使って火をしずめています。

* 正解は③④

（「ひ」は「火」に通じ、「へ」はオナラの意味にも取られるので、外されたといわれます。）

探検! 体験! Explore! Experience! Edo-Tokyo 江戸東京

解説シート 第2章

もっと探検! 江戸東京



✿ にぎわいスポット・江戸 ✿

江戸は、18世紀前半には人口が約100万人にのぼったと言われます。これは、当時の世界の都市の中でもトップクラスを誇りました。一大消費地となった江戸の町は、「天下の台所」と呼ばれた大坂と結ぶ流通によって、多くの物が運ばれ、商業が盛んに行われました。人びとは、近郊の山や川で、四季おりおりのレジャーを楽しみ、歌舞伎に心を躍らせます。また、子どもたちの教育にも力を入れました。これらが、現在にいたる東京の活力のみなもとになっていったのです。

歌舞伎 かぶき

歌舞伎は、1603年（慶長8）に出雲の巫女を名乗る国という女性が京都で行った踊りに始まる言われます。かぶきとは、常識から外れた異端の服装や行動を指す「傾く」という動詞から派生した言葉です。男装した国の踊りは「かぶき踊り」と呼ばれ人気がありました。その後、風紀を乱すとして女性が舞台上に立つことは禁止されました。美少年たちの若衆歌舞伎が盛んになりますが、こちらも禁止。以後、成人した男子のみで演じることを条件に野郎歌舞伎として許可されました。

江戸での歌舞伎興行は、1624年（寛永1）中橋南地（現京橋付近）に、猿若勘三郎が幕府の許可を得て芝居小屋の櫓をあげたことによるとされています。元禄期（1688～1704）には堺町に移転した中村座、葺屋町の市村座、木挽町の山村座・森田座の四座が興行をしていましたが、山村座は江島生島事件で廃絶となり、江戸三座となりました。天保改革時に、江戸三座は、江戸の辺境地であった浅草の一角へ強制移転を命じられます。その町名は歌舞伎にちなんで猿若町と変更されました。



江戸末期（猿若町時代）の劇場内部の図

「踊形江戸絵巻」初代歌川国貞（三代豊国）／画 1858年（安政5）7月

舞台上、向かって右側には中村座の紋、中央には下手側には森（守）田座の紋が描かれており、特定の劇場ではなく見立絵として描かれたものです。「暫」の扮装で花道に登場するのは初代河原崎権十郎（後の九代目市川團十郎）です。見物している人びとの楽しそうな様子も生き生きと描かれています。

探検! 体験! Explore! Experience! Edo-Tokyo 江戸東京

解説シート 第3章

もっと探検! 江戸東京



江戸アート

戦争のない平和な世が続いた江戸時代の日本では、さまざまな文化が花開きました。日本の風土を生かして、漆器や染織品などの美しい工芸品が作られ、江戸の暮らしをいろどりました。なかでも浮世絵は、市民の暮らしの中から生まれた芸術です。葛飾北斎や歌川広重などの絵師とすぐれた職人による精密な版画技術によって、何気ない町の生活や風俗、日本の美しい風景が生き生きと描かれました。その高いデザイン性や大胆な構図は、ゴッホやドビュッシーなどヨーロッパの芸術家たちに大きな影響を与えています。

ジャポニズム

ジャポニズムとは 19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてヨーロッパ全土で起こった日本美術の流行のことです。日本の開国、そしてロンドン万国博覧会（1862 年）、パリ万国博覧会（1867 年）などをきっかけに日本の陶磁器、掛軸、浮世絵、団扇など、大量の文物が流入し、日本の珍しくも美しい品々は西洋人の関心をとらえ、大流行となりました。特に印象派の人びとに多大な影響を与え、フィンセント・ファン・ゴッホ（1853～1890）やクロード・モネ（1840～1926）、エドガー・ドガ（1834～1917）、といった印象派の画家たちは熱狂的に浮世絵を愛好し、かつ影響を受け、日本趣味のさまざまな作品が生まれました。

中でも強い関心を示した芸術家として有名なゴッホはパリ在住時代に浮世絵展を開催するほど浮世絵に魅了されていました。1887 年には「タンギー親爺」の肖像画にいくつかの浮世絵を描き込んでいるほか、歌川広重（1797～1858）の「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」、「名所江戸百景 亀戸梅屋舗」などの浮世絵作品そのものを模写した作品も残されています。



「名所江戸百景 亀戸梅屋舗」
歌川広重/画 魚屋栄吉/版 1857 年（安政 4）



「名所江戸百景 大はしあたけの夕立」
歌川広重/画 魚屋栄吉/版 1857 年（安政 4）

「名所江戸百景」は広重の最晩年を代表する江戸名所絵シリーズです。全 119 枚揃物（二代広重「赤坂桐畑雨中夕けい」も含む）で遠近を強調した大胆な構図と鮮やかな色彩が特徴です。また丁寧な彫りや摺りの技術にも見どころが多い作品です。



江戸の好奇心が時代をひらく



江戸幕府は、中国・オランダなど一部を除いた外国との交流を禁止する、いわゆる鎖国を行いましたが、貿易港長崎などわずかに開かれた窓を通じて、海の向こうの情報が日本に入ってきました。18世紀中ごろは、幕府が洋書の輸入に対して規制をゆるめたことがきっかけで、日本の洋学が発達していきました。江戸では平賀源内や杉田玄白らが活躍し、オランダ語の本を見ながら手探りで西洋の学問を学び、新しい知識や技術を生み出しました。天文学や測量術も発達し、伊能忠敬は日本中を歩いて正確な日本地図を作り上げました。江戸の好奇心が、近代への扉を開いたのです。

クイズに挑戦!

杉田玄白が『解体新書』を著した時代は、まだ本格的な蘭和辞書がなかったため、オランダ語を日本語に翻訳するのに大変な苦勞をしました。オランダの解剖書『ターヘル・アナトミア』に書かれるオランダ語の「(鼻は)フルヘッヘンド」という言葉が「うずたかい」という意味であることがわかるまで、玄白はまるでクイズを解くようにあれこれ悩んだことは有名です。

さて、『解体新書』の中には、この時初めて日本語に翻訳され、現在も使われている医学用語がいくつかあります。下の中から選んでみましょう。(答えは2つあります)

※正解は下にあります。



- ①動脈
- ②心臓
- ③精神
- ④神経



『解体新書』 杉田玄白/著 1774年(安永3)

オランダの解剖書『ターヘル・アナトミア』を日本語に翻訳した本です。玄白は、刑場で行われた「^{ふわ}腑分け」(人体解剖)を見学して、洋書の正確さにおどろき、苦心の末に仕事をなしとげました。

*正解は①④



❀ すごいぞ、ニッポンの知恵—和紙のチカラ ❀

7世紀頃、中国から日本に紙づくりが伝わりました。当時、紙はたいへん貴重だったので、書写材として使われていました。しかし、日本の風土や文化に育まれ、手技を駆使した和紙が花開くと、薄くても強靱という紙の特性を生かし、さまざまな加工品が作られました。江戸時代になると、和紙は、日常生活に欠かせない素材と言われるまでになりました。ここでは、日本の暮らしの中にとくみに取り入れられた和紙の製品の一部を紹介します。

和紙の製品をさがしてみよう

19世紀、日本に來航した西洋の知識人たちは、和紙のすばらしさをたたえました。西洋における紙の用途は、文字や絵を書く、印刷に使用するなど記録用紙が主でした。しかし日本では、記録用紙以外に、障子や壁紙といったインテリア素材として、美術工芸の分野で、また照明具、雨傘、衣類などの日用品に使っていたからです。これらの品は、紙を素材のまま使用するだけでなく、揉んだり皺をつけたり、油や漆を塗り防水加工や紙の強度を増すなど、その用途に合わせ、さまざまな工夫をして作っていました。こうした先人の知恵と巧みによる和紙の製品は、決して“昔のモノ”ではありません。作られた当時の形のまま、あるいは現代風にアレンジして、今も使っています。カーテンのような形をした和紙のディスプレイが、パリの高級ブランドのショーウィンドーを飾るなど、海外でも使用しています。みなさんの身のまわりにも、アツと驚くような和紙の製品があるかもしれませんね。



(左) 紙布の袴 (19世紀前半)

紙布は紙を糸状にして織った布です。現在は、伝統の技を途絶えさせないように、細々とですが製作しています。



(右) 遠州行灯 (19世紀前半)

和紙のランプシェードは、光をやわらげ素敵空間を演出してくれるので、国内外で人気があります。

探検! 体験! Explore! Experience! Edo-Tokyo 江戸東京

解説シート 第5章

もっと探検! 江戸東京



❀ 帝都東京 ❀

1868年(明治1)の明治維新によって、長かった武士の時代は終わり、江戸が首都東京になりました。新しい日本の国家は、欧米の制度や文化を積極的に取り入れ、銀座には煉瓦造りの洋風の町並みが現れました。江戸時代から庶民の盛り場だった浅草には、「凌雲閣」という高い塔が築かれ、見世物興行が人気を集めました。交通手段の乗り物も、駕籠にかわって人力車や蒸気機関車などが現れ、やがて自動車が東京の町を走るようになり、町の景観が大きく変わっていきました。

文明開化ではやったモノ、すたれたモノ ガチンコ勝負!

明治維新によって、外国との交流が進むと、西洋からいろいろな物や制度が日本に入ってくるようになりました。西洋の便利な品物が生活に取り入れられ、洋風の暮らし方が人びとに受け入れられる一方で、日本の伝統的な生活用品がしだいにすたれていきました。

下の絵は、当時世の中にはやった西洋の品物と日本の品物が戦う姿を描いて、急激に洋風化していく社会を風刺したものです。どんな品物どうしが戦っているのか、見てみましょう。



「開化旧弊興廃くらべ」歌川芳藤／画 1882年(明治15)

- ①ランプ VS カンテラと行灯
- ②こうもり傘と雨コート VS 唐傘と^{からかさ}かっぱ
- ③郵便 VS ^{ひきやく}飛脚
- ④シャボン VS ぬか
- ⑤外国産米 VS 国産米
- ⑥人力車 VS ^{かご}駕籠
- ⑦写真 VS ^{にしきえ}錦絵



東京スタイル

政治や経済、産業の近代化を背景に、人びとの生活も新しい時代にふさわしく変化しました。人やお金が集まる東京は、モダンな文化の発信地として栄えました。三越や松屋などの百貨店が最新流行の商品を生み出し、大正～昭和前期には「モボ・モガ」（モダンボーイ・モダンガールの略）と呼ばれた若者たちが、街を闊歩し銀座のカフェやピヤホールで遊びました。女性の社会進出が始まったのもこの頃です。ここでは、東京の暮らしと文化の多様なスタイルを紹介します。

あこがれの百貨店

現在の百貨店の多くは、江戸時代から続く大きな呉服店が前身で、明治時代後期に次々と百貨店に様変わりしました。それまでの座売り（番頭が客の相手をして要望・好みを聞きだし、奥の蔵から商品を丁稚に持ち出させ販売する）から、その場で商品が見られる陳列販売に、建物は、商家風の店舗から、欧米のデパートの様式になった高層の洋風建築となりました。ショーウィンドーには最新流行の商品が美しく飾られ、夜はイルミネーションで堂々とした外観を照らしました。また百貨店での楽しみは、買い物以外にも楽隊の演奏や、食堂での食事など盛りだくさんで、市民にとって夢と憧れの場所となったのです。



←最上階の大食堂

よそ行きの服を着た子どもがメニューサンプルのショーケースをのぞいています。1930年（昭和5）には、日本橋三越の食堂に富士山型ライス付きのお子様洋食が登場しました。

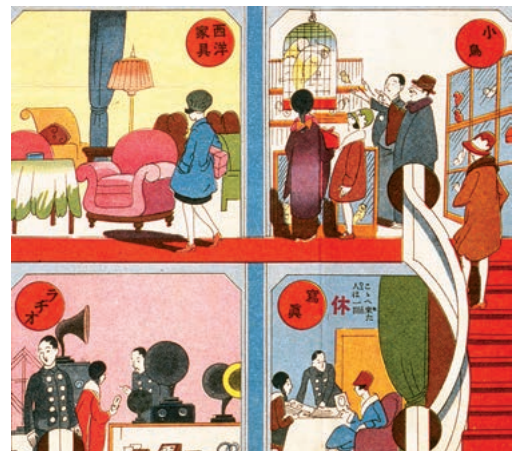


←エスカレーター

店員が乗り降りに慣れないお客の介助を行いました。

各売り場→

品揃えが豊富なだけでなく、店員に気兼ねなく自由に見てまわることができるのが百貨店人気を支えました。





❀ 災禍を乗り越えて—震災・戦災とよみがえる東京 ❀

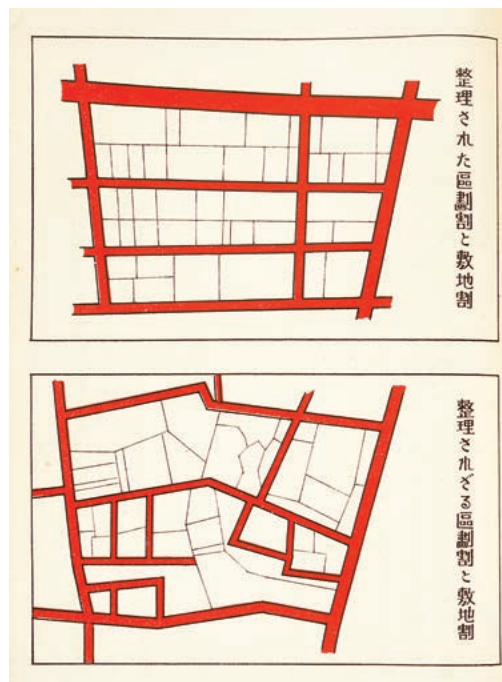
近代の東京は、二度の大きな困難に見舞われました。それは、1923年（大正12）の関東大震災、そして1945年（昭和20）の東京大空襲です。町は焼け野原となり、多くの人びとの生命と生活が奪われました。しかし、そのたびに東京の人びとは都市をよみがえらせ、新たな歴史を作り上げました。首都東京はこうした先人たちの知恵と苦勞を受け継ぎ、現在にいたっています。そして、ここから日本の新しい文化が生まれ、世界に発信されているのです。

区画整理は百年の大計

1923年（大正12）に起きた関東大震災で、東京の町は大きな被害を受けました。被害を大きくしたのは、地震の後の火事によるものでした。江戸時代の面影が残る古い町並みは、狭い道路が迷路のように入り組んで、消防活動を難しくさせたのです。

焼け跡から立ち上がった人びとは、防災の町作りをしようと考えました。広いまっすぐな道路を作って都市の大動脈とし、鉄筋コンクリート造りの復興小学校を建てて避難場所にも使えるようにして、そばに公園を作りました。町の中も、災害時にスムーズな消防活動ができるよう、道路を整える区画整理を行いました。

この考え方は、もと東京市長で、帝都復興院総裁として東京の復興を指揮した、後藤新平（1857-1929）によるものです。区画整理にあたっては、後藤に育てられた東京市の職員たちがていねいに説得し、地主から少しずつ土地を提供してもらい、実現していきました。こうして、東京は新たによみがえったのです。その後、1945年（昭和20）の東京大空襲で再び焼け野原になりましたが、震災復興で築かれた都市の形はゆるぎなく、現在の東京に引き継がれています。



『帝都復興の基礎 区画整理早わかり』東京市役所／編 1924年（大正13）

区画整理事業は、対象となる土地の持ち主の協力を得なければなりません。東京市は、このパンフレットを住民に配って、区画整理がなぜ必要なのかをわかりやすく説明しました。

探検! 体験! Explore! Experience! Edo-Tokyo 江戸東京

解説シート コラム展示 2

もっと探検! 江戸東京



江戸東京レアグッズ



ここでは、先人たちのユニークな知恵と技術で製作された、珍しい道具を紹介します。海外から多様な道具が取り入れられるたび、日本在来の技術を駆使した新しい製品が作られました。こうした品々は、現代の私たちの目には新鮮に映ります。

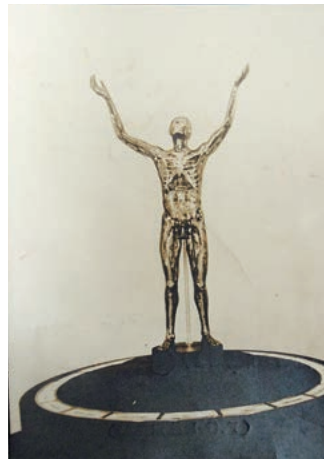
また、世相を反映して企画製作された楽しい記念グッズなどを展示します。

透明人間

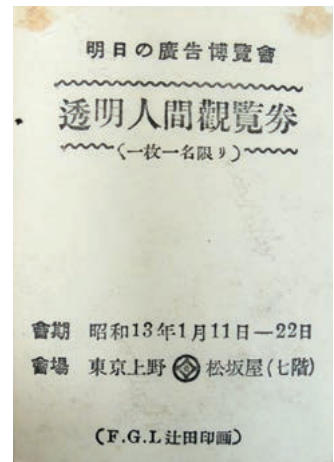
1938年（昭和13）1月11日、東京上野の松坂屋7階に透明人間が現れました。

現れても透明人間？手がかりは、当時の観覧券と、新聞広告・記事です。観覧券には、写真がプリントされています。そこには、体内の骨格と内臓が透けて見えているのです！

新聞広告には、「知っていなければならぬ人体の秘密は見る人をして人体解剖室にある思いを致さしむ。」と記されています。



観覧券（裏）



観覧券（表）

明日の廣告博覧會
社信通報電本日 催主 省工商 授後

第7階6日 一十
場會所 りよ 日一十
てま 日二廿

科 學 の 驚 異
透明人間

野上 京東
屋坂松

1938年（昭和13）1月10日の新聞広告
東京朝日新聞／掲載

この透明人間は、日本電報通信社（後年の株電通）主催、商工省後援の「明日の広告博覧会」で公開されました。広告博覧会には、メーカー各社、映画会社等53社が参加しています。

ライオン歯磨、森永ミルクキャラメル、三菱鉛筆、福助足袋、キリンビール、トヨタ自動車など、現在でも馴染みあるメーカーも名を連ねています。

商品広告を主体にした内容で、観客を呼び寄せる広告塔の役割でこの透明人間が現れました。

透明人間はドイツとフランスにも各1体存在していました。誕生した場所は、ドイツ・ドレスデンにあるドイツ衛生博物館。一年の歳月をかけて製作されたものです。ドイツ人男性と等身大で、皮膚を通して人体組織が見えるようになっていました。

1938年（昭和13）1月10日の新聞広告
東京朝日新聞／掲載